

葛はツルニンジン属 (*Codonopsis*) の持つ一特徴であらう。

#### ○ハブテコブラ追記 (前川文夫)

本誌 20: 120 (昭和19) に久内清孝氏がオホケタデを本草時代にハブテコブラとよんだという記事を書かれた。面白い名前なのでその後見つかると思書留めておいたが徳川時代にはかなり一般にも使われ同時に数種の植物をさすかの様に見えて来たのでこゝに記して御参考に供する。

カブテコブラ, 植物學雜誌 6 p. (371) (1892) に長野菊次郎氏がオホケタデの筑前方言として記す。少くとも明治年間には通用していた名であることがわかる。

ハブテコブラ, カブテコブラ, 蘭山の啓蒙 31 にキササゲに宛てゝいる。

ハブテコブラ (紀州若山, 雲州), ハビテコブラ (熊野) とともにゴシユを指すと同じく啓蒙 28 にある。

habite-kobura. Siebold et Zuccarini, Fl. Japonica: 50 に *Boymia rutaecarpa* (ゴシユ) の條に和名としてこの語あり。

Cap di Cobra nomine lusitanico. Thunberg が Flora Japonica: 269 (1784) に *Croton acutum* Thunb. を記載し, 長崎に栽培, ポルトガルより渡來と記した條下に, その日本名として上記の名と附記とがある。このものは今の何かわからないがどうやら渡來した名の變遷がおぼろげながらわかるように見える。

#### ○導管内のラセンが糸になつて出て来る二三の例 (前川文夫)

中將姫が襪を織つた原料のハスはあまりにも有名だが, 短かいものならば二三ある。自然にある時節になるとらせんがほどけて白い糸となるのはモクレン属の種子である。熟すると例の朱紅色で扁球形の種子が不規則なあまり氣持の良くない恰好の果實からぶら下がるが, この時のらせんの糸は相當に丈夫だし又長いものは 1 cm 以上もつづく。これは胚柄内から出たものである。葉では柄を折るとよく出るものがある。子供達はこれを知つて居て柄をこまかく折つていくつもぶらさげて遊ぶことがある。ドクダミは可成よくこの糸が出る。タマアジサキでも出て来るのに氣がついた。ミヅキはそれよりもよい例であつて相當長いものがとれるが, これは小倉謙教授から先年日光で教へて貰ひて知つた。山崎敬君からは先日サンゴジュの葉で子供の時遊んだと聞いた。搜すと存外例があると思ふ。肉質の柄で曲げるとピチツと折れるものでないと糸がついて来ないやうだ。導管内の螺旋狀の肥厚の説明によいし, 又こんなに細くて均一の太さの糸は何か特殊の用途でも見附かるかも知れない。

#### ○本邦産ツチトリモチ属の最古記録 (津山 尚)

日本内地フローラにツチトリモチ属が確立されたのは, 明治16年(1883)大久保三郎氏の天城山での未熟品の發見に次いで, 其前後に牧野富太郎先生が土佐で完全な標本を採集されてこれを東京大學に送附され, 後明治 39 年 (1902) *Balanophora japonica* Makino なる學名が與へられた時に初まるのであるが, 一方琉球フローラでは英國 Kew